

「億総中流」の豊かさを人々が享受していた1980年。ある文芸賞受賞作が社会現象を巻き起こした。

△結局、私は「なんとなくの気分」で生きていっている。(略)野菜や肉を買うなら、青山の紀ノ国屋がいいし、魚だったら広尾の明治屋が、少し遠くても築地まで行ってしまおう。

東京に住む若者の風俗をちりばめ、女子学生の日常を描

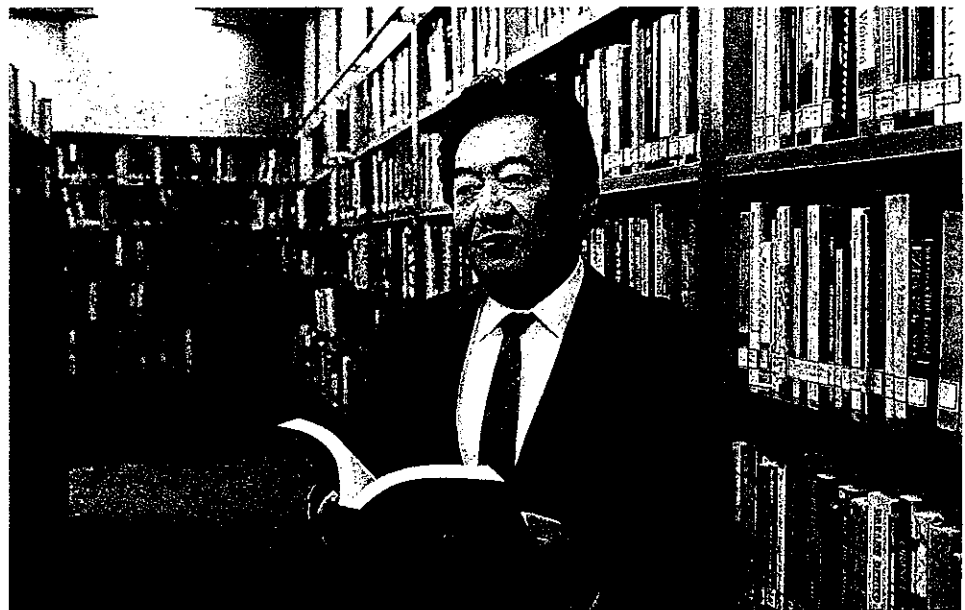
# 原点

いた『なんとなく、クリスマス』。同年春、当時在学中の一橋大学の図書館で3週間書き上げた、初めての小説だった。所属サークルのトラップで1年間の停学処分を受け、卒業と就職がふいになくなり、ぼつかりと空いてしまった時間を使った。

学生を駆り立てた「政治の季節」はとうに過ぎた。その後の「今」を生きている若者の物語が書けないか。「気分よく暮らすことを、行動のメシヤ」にするような。とはいえず

## 豊かさの終わりの始まり

たそがれ



若い頃は、よく都心の図書館に籠もり、原稿を書いた。「楽しい時も悲しい時も同じように時間が過ぎるなら、何事からも目をそらしたくない」(東京の国際文化会館で)

### 田中康夫さん 作家

負ったわけでもない。六法全書を眺めていても味気なかったから」。さらりと、はぐらかす。

無名の新人は瞬く間に時代の寵児になった。ブランドに身を固めた若者を指す「クリスタル族」という流行語も

\*

生まれ。が、文壇の拒絶反応は強烈だった。「単なる力タログ小説」「空疎で軽薄」。候補になった翌年の芥川賞は逃した。

「当時の僕にとって衝撃的な予測値。この国のあり方が変容していくんだらうな。そんなふう感じた」。高度消費社会の申し子のように華やかに登場しながら、豊かさの「終わりの始まり」を見つめていた。

たなか・やすお 1956年、東京生まれ。64年から75年まで長野県で過ごす。95年の阪神・淡路大震災後はボランティア活動に従事し、2000年から長野県知事など歴任。小説に『ブリアントな午後』、評論に『フアディッシュ考現学』など。『33年後のなんとなく、クリスタル』(河出書房新社)には、4388の注釈がつく。

2000年から長野県知事、その後は参議院議員、衆議院議員を務め、目まぐるしい日々を過ごす。2年前の衆院選で落選した。ぼつかりと空いた時間。かつて紡いだ物語と向き合った。

『33年後のなんとなく、クリスタル』は、50代半ばになった元女子学生たちが、フェイスブックやLINEを通じて再会する。

化粧品会社に入社した由利は、社会貢献の方法を模索している。恵まれた結婚をしながら家族との関係に悩む者、カリスマモデルとして活躍する者。

由利は言う。△黄昏時って案外、好きよ。だって、夕焼けの名残りの赤みって、どことなく夜明けの感じと似ているでしょ。

「永遠の右肩上がりなんてない。でも、永遠の右肩下がりのない。空威張りでない、地に足のついた形で誇らしい生き方を求めることが経済だし、政治だし、文学だと思っている」

たそがれの中の一瞬のきらめきを複雑に反射させながら、クリスタルは新たな輝きを放ち続ける。

文・山田恵美  
写真・加藤祐治